

# 情報酸化物 小原孝弼

情報過多の時代である。

プラットホームの小っちゃな売店には、何万語と詰め込まれた情報が目もあやな徒花に包まれて積み重なった週刊誌の顔々——電車の軌と構内アナウンスなどの効果音に助けられ、昨日テレビで見た古いニュースが、われこそは新鮮なホットニュースとばかりに新しく装おい、折り重なってせせりだし、慢性情報過多の人間に迫ってくる。地下道を潜れば、それぞれの方向という絆しかもたない人間が群となり、イキのよさそうな男と女はコスチュームという情報を手な色と寸尺の差で拡散し、そうでない男と女は、かつて情報が一方からしか入ってこなかった時に、それらをがっさり吸収しようとするくすんだ色に身を固

め、肩をすり合わせて波をうち下水道のよ  
うな穴を流れていく。

街は雑多な情報の排泄物が渦を巻く海峡  
であり、極彩色で造花したジャングルであ  
る。人の群はギンギラギンに輝くカブト虫  
たちの流れをぬって恐怖の信号を發し、カ  
ブト虫たちはいらだちながら体を震わせ不  
満の色の黒いガスのしぶきをあげ吐き出  
し、奇声をあげながらうねりをつづける。

街のビルというビルは薄い煙をふきあげ  
行くてを灰色で遮って情報を整理しようと  
するが、薄日が力をふりしぼってスモック  
の間を通りぬけ、情報酸化物と化そうとす  
る人の群にたどりつき、どの顔にも肩にも  
当ってゆれる。

過密な情報の街の上に平等に薄日が注ぐ

が、薄日という情報をくっつけてる SO<sub>2</sub>  
(硫黄酸化物) NO<sub>x</sub>(窒素酸化物) CO  
(一酸化炭素) O<sub>3</sub>(オキシダント) O<sub>3</sub>  
H(炭化水素) Pb(鉛) PbCl(有機塩  
素化合物) など、目に見えないという情報  
の定義そのものの絢爛たる綴帳が生きもの  
の舞合をすっぱりと包みこむ。

茶の間の熱のなかにはもって親切でやさ  
しく慈愛のこもったテレビコマーシャル  
が、色のついた機関銃の弾となって飛んで  
くる。縁側には、ぶ厚く積った情報の屍骸  
の新聞があくびをし、トイレの中で小宇宙  
をつくらうとすれば、隣家から人生のもの  
悲しさをメロディというメディアにのせて  
歌謡曲がひたひたと寄ってくる。いいか  
げんにせえよ」と公園に出れば、情報過疎  
を好む若者のカップルがツウ・ウェイ・コ  
ミュニケーションの花を咲かせ、夕闇が数  
多くのユニットの色を拭いさるうとすれば  
情報は色でなく、形で、音で、それは人間の  
最後の岩である本能の受信機に突き刺さる  
的確な直線の矢となって飛び込んでくる。  
闇はもう人間を孤独にはしてくれない。

闇は情報の未整理な人間を狂わせ、凶暴に  
し、不安がらせ、明日の時間をもあらかじ  
め奪ひ、空白な情報の点の集積、つまり面  
となって迫ってくる。不眠症、いらいら、  
欲求不満、カタルシスの鈍化、そこには今  
日の食糧のなかに含まれていた、BHC、  
カドミウムなどの調味料をそしゃく、吸収  
排せつする気力すらも失わせる。情報酸化  
物の人間がいつせいに朽木のごとく倒れな  
いのは自分たちが築いた狂気の病室に入っ  
ているからである。だから情報が何万ピッ  
ト、何千ホン、何百PPM、何億刺激の注  
射液となって人間の内深く浸蝕しようと  
も、家も街も山も野もきれいに情報酸化物  
に変えても、病室の壁と中に棲息する人間  
は狂気の度合いを厚くして身を守りこの地  
上での短い滞在期間中に死人を生き返らせ  
る死神となろうとあせる。

策にあぐねた情報酸化物たちは、刹那的  
となり、いやそれは情報の到達量と速度に  
合わせたもつとも妥当な生活の智恵である  
のだが、日毎くりかえされる広告という強  
姦のデモンストラーション効果に煽られ、

その日に稼いだ限られた金をいっきよに何  
百倍かに増やせば狂気の病室がバラ色に染  
まって見えるだろうという錯覚におち入り  
ギャンブル人口二千万人という数を作る。  
胴元がひと祭り煽りたてれば宝くじは一  
枚残さず売り切れ、競輪競馬を合わせる  
ギャンブルは一年間に一兆三千億円の売  
り上げをみせ、海外にも鳴りひびいている  
円が、薄っぺらな紙片に化ける。

なぜこのように過熱状態になるのかと学  
者に聞けば、さも熟知りの如く、GNPあ  
がり資本主義体制が熟し、個人は歯車にな  
ったからだ。またある作家は、公害だ、  
ややこしい人間関係だ、と日夜さいなまれ  
ている都会人の脱行為、人間復権だとのた  
まい己だけが正常であるかの如く言う。

情報を即物的にしか受けとれない狂気の  
諸々にとっては、個人が社会の歯車となら  
なくても、人間復権が回復されても、抽象  
的な欲求の充足はつかみえないことを御存  
知ないのか。

とりわけ即物的なテレビのコマーシヤル  
東京の民放だけで月に九千本ものコマーシ

ヤルを空中に霧散させ、慢性飢餓人間をせ  
つせと製造する。テレビジョンなるものが  
できてから今日までに8万本ものコマーシ  
ヤル・フィルムが作られ、一本が平均200  
多いもので1,000回も放映される。その放映総  
数百数十万回……。

「ハッパフミフミ」「うーんマダム」  
「ウハウハ」「もあるでしょう」「超えてる」  
「お母さーん」様々な売り手の声にまどわ  
されて飲んだ薬はフィリソングというオプ  
ラートの中にわが狂える同志たちを無限の  
窮乏感に陥し入れる麻薬が盛り込まれてい  
た。大量生産、大量販売という前へ押しだ  
すだけのルールで攻めてくる広告情報は、  
今日ただいま薬が利きすぎ公害やコンシュ  
ーリズムなど起りはたと当惑している。  
しかし脱広告、脱々広告と手をかえて攻  
めよせると、狂える小豚たちは遂には欲望  
追求の奴隷となるか、あるいは不可能と知  
ってパニックを起すか、その前に情報は凶  
暴な天使となって狂気の病室をも破壊し情  
報酸化物の化石となった大地にどっしりと  
根をおろすにちがいない。